

# 知育玩具を用いた子どもの生活理解力に関する研究

## その1

### A Study of Children's Ability to Understand Life Utilizing Intellectual Training Toys

#### Part1

千森 督子 平林 由理

Tokuko Chimori Yuri Hirabayashi

#### 要約

子どもが日常生活を理解することは生きることの学習につながり、家庭教育の第一歩であるといえる。本稿では、子どもの生活理解力を知育玩具を用いた「お世話遊び」と実生活を比較しながら捉えることを試みた。その結果、4歳児では起床から就寝に至る生活に必要な基本的な生活行為が認識されていることやお世話遊びには日常の生活習慣が反映されていることが明らかになった。また、社会性も確認され、生活空間や設備への理解も垣間みられた。実際の時系列に沿った生活行為を再現できるかは今後の課題であり、さらに年齢層を広げた研究を展開し、発達段階との対応関係を検討していきたい。

#### はじめに

生活とは人が生きながらえるためにする様々な活動や行為である。ここでは狭義の家族によって営まれる家庭生活における主な行為を捉える。生活をともにする家族のなかでも子どもが日常生活を理解することは、生きることの学習につながり、家庭教育の第一歩であると考えられる。

子どもは生活習慣を年齢と共に獲得していくが、起床から就寝までの生活に必要な基本的な生活習慣を6歳頃までに獲得し、独りでできるようになるとされている<sup>(1)</sup>。その背景には家庭教育、さらに社会教育も関係していると考えられる。一方、子どもの生活理解力や生活技術の習得には遊びも大きく関わっている。子どもは遊びの中で様々な生活に関することを学んでいく。むしろ子どもにとって遊びは生活そのものである。子どもの遊びの種類と発達に関する文献<sup>(2)</sup>によると、0歳からすでに感覚遊びが始まり、1歳からは運動遊び、受容遊びが

行われ、模倣遊びの「ままごと遊び」や「人形遊び」は2歳頃からは行われていくことがわかる。これらの「ごっこ遊び」<sup>(3)</sup>は最も想像力が発揮され<sup>(3)</sup>、それ以外に言語能力、社会性が育成される<sup>(4)</sup>。身体的・精神的な発達段階を反映して変化したが、2歳頃からは年齢を重ねるにつれ内容が変化し、3歳から就学前までが全盛期である<sup>(4)</sup>、<sup>(5)</sup>。「人形あそび」と「ままごと遊び」を取り入れた、「お世話遊び」<sup>(2)</sup>は、ごっこ遊びでも生活に直結したものである。近年、様々な知育人形や玩具があり、中には、子どもの生活基礎学習力育成や生活技術の習得のみならず、生活理解力を把握するのにも役立つものがある。また、それらを用いた先行研究があり<sup>(6)</sup>、研究が可能であるといえる。

そこで、本稿は、知育玩具として提供されている人形や生活用具、生活空間を用いた、「お世話遊び」での実際のふるまいと実生活から、起床から就寝までの基本的な生活習慣に関する子どもの理解力を把握することを目的とする。

## 方法

知育人形や玩具を使ったお世話遊びの様子を観察する方法をとる。実験内容は、生活の基本である睡眠、起床、更衣、排泄、食事、家事行為に関する以下の①から⑧である。①就寝(ベッドに人形を寝かせられるか、布団を掛けられるか)、②起床(着脱衣、櫛で整髪できるか)、③歯磨き(歯磨き粉をつけられるか、磨く動作ができるか)、④排泄(パンツを下ろして便座に座らせられるか、パンツを上げて便を流すレバーを押せるか)、⑤食事(食べ物を器から取り出せるか、口に食べ物を持っていけるか、片づけられるか)、⑥外出(外出セットで準備できるか、人形をベビーカーに乗せられるか、ベビーカーを動かせるか)、⑦洗濯(洗濯物を洗濯機に入れられるか、干せるか、アイロンをかけられるか、洗濯物を畳めるか)、⑧育児(ミルクをあげられるか、おんぶ紐を使えるか)。なお、家事に係る洗濯、育児は子ども本人が実体験することは少ないが、本研究では、子どもの発達段階や生活習慣を捉えるために、こうした頻度の低い行為も合わせて検討した。

用いる玩具は生活用具が揃っている知育人形シリーズのものを使用した。人形とインターホン付きの家以外に各生活行為に用いる玩具は、①就寝(ベッド、布団)、②起床(服、靴下、櫛、髪留め)、③歯磨き(歯磨き粉、歯ブラシ)、④排泄(便器、

服)、⑤食事(弁当、フォーク・スプーン、蓋バンド)、⑥外出(シートベルトとバスケット付ベビーカー、靴、ポシェット、帽子)、⑦洗濯(洗濯機、物干、アイロン)、⑧育児(哺乳瓶、おんぶ紐)であった。

実験当日に内容と方法を子どもに説明し、実験内容に関する人形と家、玩具を用いて、自由に一人遊びをしてもらう方法をとった。子ども一人に観察者が付き、行動観察をしながら記録を行為別に記入し、写真撮影を行った。

実験はすべて本学で実施した。1回目の実験は平成27年8月6日に<sup>註3, (7), (8)</sup>、2回目は平成28年12月3日に行った。

参加児の年齢は次の観点から設定した。まず、先行研究<sup>(6)</sup>で、人形相手に日常よく行う着替えが3歳児から可能である知見が得られている点、つぎに、本研究は更衣以外の生活の基本である睡眠、起床、排泄、食事、家事と多岐にわたり検討することから、参加児は先行研究より1歳上の4歳児を対象とした。4歳児の運動機能では、手先も器用になり、紐を通したり結んだり、はさみを扱えるようになる<sup>(9)</sup>。そのために、玩具を用いて作業することは可能であると予想される。

参加児は同じ年齢の子ども3名であり、1回目の実験では4歳4ヶ月(A子)と4歳3ヶ月(B子)の2名を対象とした。実験は交互に行った。2回目の実験は4歳3ヶ月(C子)の1名である。3名共に4人家族で、長女であるが、A子とB子は1歳前後の弟がおり、C子は4歳年上の兄がいる(表1)。A子は実験で用いた人形を所有し、すでに「人形遊び」は経験しているが、玩具は所有していない。B子とC子は人形も所有していない、全く初めてであった。

さらに、考察には母親に実施した日常生活の経験や様子に関する面接聞き取り調査結果も加える。

表1 参加児概要

	A子	B子	C子
年齢	4歳4カ月	4歳3カ月	4歳3カ月
性別	女	女	女
兄弟	第一人	第一人	兄一人

表2 基本的生活習慣のめやす

	0～1歳	～2歳～	～3歳～	～4歳～	～5歳～	～6歳～
食事	茶碗を持って飲む	スプーンで食べる	箸を使うようになる	箸を持ち、完全に一人で食べる		
睡眠	一人寝ができる		一人で寝起きする	寝るときのあいさつができる		
排泄	排便を知らせる	夜のおむつが不要になる	一人で便所へ行き、排尿する	一人で便所へ行き、排便の始末をする		
着脱衣		一人で脱いだり着たりするようになる	靴下、パンツを履く	前のボタンをかける	紐を固結びする	一人で全部着る
清潔		手を洗う	歯磨き・うがいをする 鼻をかむ、髪を梳かす			

「家庭基礎」<sup>(10)</sup>より作成

## 結果及び考察

### 1. 文献にみる子どもの基本的生活習慣のめやす

実験結果を考察する前に、食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔の基本的生活習慣を子どもの年齢別にまとめた表2から検討する。

1歳頃から食事、睡眠、排泄の兆しが見られ始め、6歳ではこれらすべてで自立できるとされている。対象の4歳児は、食事、睡眠、排泄、清潔の行為がすべて一人でできるが、着脱衣は前のボタンをかけることは可能であるが、一人で全部をすることは難しいことがわかる。

### 2. 参加児別知育玩具を用いた実験と実生活の考察結果

実験の様子を写真1から写真4に示し、実験結果と母親からの聞き取り調査による実生活の状況を表3にまとめた。

結果を参加児別に考察すると、A子は実験では、④排泄に関して、パンツをはいたまま便座に座らせ、下ろすことはしなかったが、他の行為はすべてできた。特に、②起床での整髪においては、髪留めで髪をくくることができた。⑥外出の準備では、靴下→靴→ポシェット→帽子の順に支度ができた。さらに、人形をベビーカーに乗せてから安全ベルトを付けることができた。⑦洗濯では、洗濯物を干すことができた。アイロンをかける時に、服を広げてかける現実性がみられた。洗

表3 生活行為別結果

実験結果					実生活				
行為		A子	B子	C子	行為		A子	B子	C子
就寝	ベッドに人形を寝かせられるか	○	○	○	就寝	一人で布団に入り、寝ることができるか	○		○
	布団を掛けられるか	○	○	○					
着脱衣 整髪	服の着替えができるか	○	○	△	着脱衣 整髪	服の着替えが一人でできるか	○	○	○
	髪をクシで梳かせられるか	○	○	△		髪をクシで梳かせられるか	○	○	○
	髪を髪留めで留められ、くくれるか	○	○			髪を髪留めで留められ、くくれるか	△	△	×
歯磨き	歯磨き粉をつけられるか	○	○	○	歯磨き	歯磨き粉がつけられるか	○	○	○
	磨く動作ができるか	○	○	○		磨く動作ができるか	○	○	○
排泄	パンツを下ろして便座に座らせられるか	×	○	○	排泄	パンツを下ろして便座に座れるか	○	○	○
	パンツを上げて、便を流せるか	△	○	○		パンツを上げて、便を流せるか	○	○	○
食事	食べ物を器から取り出せるか	○	○	○	食事	食べ物を箸やフォークで器から取り出せるか	○	○	○
	口に食べ物を持っていけるか	○	○	○		自分一人で食べられるか	○	○	○
	片づけられるか	○	○	△		片づけの手伝いができるか	○	○	○
外出	外出セットで準備できるか	○	○	△	外出	外出時の身支度が一人でできるか	○	○	○
	人形をベビーカーに乗せられるか	○	○	○					
	ベビーカーを動かせるか	○	○	○					
洗濯	洗濯物を洗濯機に入れられるか	○	○	○	洗濯	洗濯物を洗濯機やかごに入れられるか	○	○	○
	洗濯物を干せるか	○	○	○		洗濯物を干す手伝いができるか	○	○	○
	アイロンをかけられるか	○	○	○		アイロンかけの手伝いができるか	×	○	×
	洗濯物を畳めるか		○	○		洗濯物をたたむ手伝いができるか	○	○	○
育児	ミルクをあげられるか	○	○	○	育児 <sup>註4</sup>	弟の世話ができるか	△	○	
	おんぶ紐を使えるか	△	△	△		弟といっしょに遊ぶか	△	△	

○は「できた」 △は「一部できた」 ×は「できなかった」

濯とアイロンかけが好きな様子であった。⑧育児では、赤ちゃん人形に哺乳瓶でミルクを飲ませることができた。聞き取り調査から弟が生まれてからミルクを飲ませることや寝かしつけに関心を持つようになったことがわかる。また、音が出る玩具には特に興味を示していた。

実生活では、②起床時に整髪はできるが、髪を髪留めでくくことはできなかった。⑦アイロンかけの手伝いは母親がさせていないために、できなかった。

B子は実験では、すべての行為ができた。特に、②起床での整髪において、人形を座らせて髪を梳かした。整髪後に髪留めで髪を留められた。③歯磨きでは、うがいもできた。⑥外出では帽子の紐を顎にかけられた。また、帰宅後は帽子を取ってから櫛で整髪をしていた。⑦洗濯では、アイロンかけをしてから服を畳んだ。⑧育児では、赤ちゃん人形にミルクを飲ませるのがとても上手にできた。おんぶ紐は人形に取り付けられ、手助けがあると背負え、取り外せた。赤ちゃんに興味があるようで、赤ちゃん人形を見て同伴してきた弟を指さしていた。母親からの聞き取り調査では家でも弟がお気に入りのようである。しかし、男子の幼児人形には興味を示さなかった。また、便器などの音が出て、動きのある玩具は何度も使って遊んでいた。

実生活では、①就寝時は家族揃って就寝しているので一人で寝た経験がなく、一人で寝られるかは不明であった。また、全くできない行為はなく、とりわけ、アイロンかけも母親の話ではハンカチ程度は見守っていたら独りでかけられた。

C子は実験では、②起床時に布団を直す丁寧さがあった。③歯磨きでは、2回歯磨き粉をつけていた。歯磨きは関心が高く、母親からの聞き取り調査では、実生活でも3歳前から自発的に歯磨きを自分でするようになった。⑦洗濯では、アイロンかけをした後に服を畳むことができた。母親によると、家では洗濯物を畳む手伝いを3歳頃からしている。全くできなかった生活行為はなかったが、②起床時と⑥外出時に、靴下や靴をうまく人形に履かせることができずに、「やって!」と観察者に助けを求めてきた。また、整髪では、櫛を用いて梳かしていたが、下から上に梳かしていた。母親からの聞き取り調査では、3歳から自分で櫛を使い髪を梳くようになったが、家でも下から上に梳かしていた<sup>25)</sup>。⑤食事での後片づけでは弁当箱に蓋をすることはできたが、蓋バンドはかけられなかった。⑧育児では、ミルクを赤ちゃん人形に飲ませていたが、よだれかけもきちんと付けていた。1歳の誕生日に別の人形をもらい、2歳



写真1 人形をベッドに寝かせる



写真2 人形にお弁当を食べさせる



写真3 家に家具や玩具を持ち込み並べる



写真4 家の中で人形とままごと遊びをする

頃から哺乳瓶でミルクをあげるようになった。さらに、親戚に赤ちゃんが生まれてから授乳などの育児に興味をもつようになった。おんぶ紐の扱いは、人形には紐を付けられたが、次の動作の自分にかけて赤ちゃん人形をおんぶすることはできず他の2名同様に補助が必要であった。家のインターホンや弁当箱などのメロディ音が出る玩具は気に入った様子であったが、機械的な音が出る洗濯機に対しては「うるさい」と言って1回しか使わなかった。何度も遊んでいたのは、「ベビーカー」、「家」、「弁当」だった。その中でも特にベビーカーは気に入っていた。実際のお出かけのようにベビーカーを押しながら室内を動き廻り、「幼稚園に行ってきます」、「お買い物に行ってきます」と人形に話しかけていた。それ以外の生活でも、「おはよう」、「ただいま」、「おやすみ」など人形と日常の挨拶がよく行われていた。

実生活では、A子と同じく、②起床時の髪を髪留めで留めたり、くくることができなかった。⑦アイロンかけの手伝いはさせていないためにできなかったが、その他はできていた。

### 3. 知育玩具を用いた実験と実生活の全体的考察結果

個人によりでき具合はやや異なるが、全体的には人形のお世話ができて、生活が理解できていた。実生活での様子と比較すると、②起床時の髪留めで留めたり、髪をくくる行為は、自分にするのは難しいようであるが、人形にはできた。⑧洗濯の項目の「アイロンかけ」は、実生活ではやけどをする等の危険性が伴うので手伝いはさせていない家庭が主であるが、知育玩具のアイロンかけは全員ができていた。玩具体験から実生活に徐々に慣れていく用い方も考えられる。⑨育児では、下の子のいない幼児や弟の年齢が小さい幼児が育児に加わるのは難しいが、興味や関心はもっており、人形にミルクをあげることはできていた。

一方、ベビーカーに人形を乗せ、他の家に遊びに行く真似もしていた。各戸内での生活だけでなく、社会への認識も垣間みられた。

全員が家には関心を示し、C子が1番目に遊んだのは家だった。全員が家に入る際にインターホンを鳴らしてから、ドアを開けていた。B子は人形といっしょに中に入った。また、C子は、家に入る前に人形の靴を入口で揃え、ドアも閉めた。日常の生活習慣や大人がしている行為、躰が反映されていると思われる。C子は、家の中にベッド・弁当箱・トイレを置き、実際の家のようにコーディネートをしていた。全員が家の中では

食事、睡眠などの生活行為を上手に再現しながら遊んでいた。このことから、住居や設備にも理解や興味があることが把握された。

## まとめ

個人的には一部できなかった行為もみられたが、総じて起床から就寝に至る生活に必要な基本的な生活習慣を遊び場面で実験的に観察することができた。4歳児前半ではすでに生活を理解し、実施する生活技術を持ち合わせ、家具や用具への認識もあることがわかった。実生活で自分自身ではあまり行わない洗濯やアイロンかけなどの行為も玩具で行うことができたのは、身の回りの大人の生活や行為を見て学習していたと考えられる。玄関で靴を揃える、挨拶をするなどの基本的な生活習慣が確立されていることも明らかになった。躰や家庭教育が子どもの遊びに反映しているといえる。

個人差もあるだろうが、家庭環境や兄弟関係の影響が結果に表れている可能性がある。実験はお母さん目線になって人形の世話をする遊びなので、一番上の子で弟がいる二人は日常生活でも育児現場に直面し、本人も手伝う機会がある。下の子のいない参加児の場合は、人形遊びの経験や親戚の乳児の存在が影響している。

ベビーカーを押しながら人形に話しかけるなどの異なる二つの行為が同時に行えている。また、他の家を訪問する真似をしてみるなど、社会性の芽生えもみられ、発達段階と呼応していることがわかった。

生活空間や設備への認識も持っており、空間を設定した方が遊びに臨場感が生じると考えられる。

ごっこ遊びであるために現実生活との関係性は必ずしも一致している訳ではないが、今回の実験から知育玩具を用いた子どもの遊びから生活理解力を把握でき、その育成にも資することがわかった。

なお、こうした行為をどの程度、実際の時系列に応じてできるかどうかは今後の課題である。さらに、年齢の幅を広げた研究を展開し、発達段階との対応関係も検討していきたい。

## 註

1. ごっこ遊びとは、「子どもが物事のまねをしたり、何かの役割を演じて遊ぶこと」をいう。

2. 役割の逆転になる、子どもが母親の立場になって人形に生活を体験させる遊びである。
3. 千森は、この研究に平成 26 年に着手し、本稿の1回目の実験は、文部科学省「平成 25 年度 地(知)の拠点整備事業」の平成 26 年度教育研究助成事業の一環として実施したものである。
4. 弟の年齢が、A子の場合は2カ月、B子の場合は1歳8カ月であった。
5. 調査後に母親から上から下へ梳かすように教えられたら、その後は上から下へ梳かすようになった。

## 文献

- (1) 牧野カツコ他：高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書 家庭基礎、p.31、東京書籍株式会社、2012
- (2) 宮本みち子他：高等学校家庭科用文部科学省検定済教科書 家庭基礎、p.43、実教出版株式会社、2016
- (3) 長橋聡：子どものごっこ遊びにおける意味の生成と遊び空間の構成、発達心理学研究、第 24 巻、第1号、pp.88-98、2013
- (4) 佐藤文子・金子佳代子他：中学校技術・家庭科用文部科学省検定済教科書 新しい技術・家庭 家庭分野、p.183、東京書籍株式会社、2015
- (5) 藤崎真知代他：保育のための発達心理学、新曜社、p.128、1998
- (6) 柳岡開地：プランニングおよび実行機能が後戻りを要するスキプトの実行に及ぼす影響の発達の検討、発達心理学研究、第 25 巻、第3号、pp.232-241、2014
- (7) 千森督子：遊具を使った子どもの生活や生活空間理解調査、平成 25 年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」子育て支援を主軸とした地(知)の拠点事業「きょう育の和」、平成 27 年度成果報告書、pp. 38-39、2016
- (8) 有元みちる他：遊具からみた生活・空間の認知と創造、和歌山信愛女子短期大学学生論集 第 44 集、pp. 33-34、2016
- (9) ミネルヴァ書房編集部編：保育所保育指針 幼稚園教育要領[解説とポイント]、pp. 78-80、ミネルヴァ書房、2008
- (10) 前掲(2)、p.41